

---

# 導くもの+

アカリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

導くもの+

### 【Nコード】

N4556N

### 【作者名】

アカリ

### 【あらすじ】

主人公、ティーナが魔導師として活躍する話、「導くもの」の世界や人物紹介です。本編の時間には全く関係のない番外編もこちらに載せてあります。

## # 魔導師編

アルベルティーナ・ギラルディーニ（ティーナ）

主人公。14歳。

黒い髪、天鷲絨色てんじゅうしよくの目。

現在、一級魔術師、魔導師候補マーゴ・デ・プリメラ マイブル。

光・火・土・水・風・闇の全属性を使うことができる全属性使いオールユーザー。

その中でも目の色に入っている風と闇の魔法が得意。

魔眼ディアフロ・アイを使って精霊を見ることができたり、魔装具ディアフロ・コーシーを作ることができたりする万能人。

転生して話の舞台である魔法がある世界に来た。

基本的には面倒くさいことが嫌いで人生適度に適当にがモットー。

しかし、祖母により魔導師マイブルになることが適任となっていることから、目立たないというところがなくなってしまつて悲しがつている。

元から髪や目の色で目立っていたことは気づいているのか、いないのか……。

厳しかった祖母によって鍛え上げられたことによって防御が最強となっている。

武器全般を使いこなし、魔法で似たようなものを作つて攻撃をする。

現在は第3皇子であるバルタザール直属の部下として日々書類と殿下と戦っている。

ティーナが契約している精霊。

> エーヴく風の鳥。

>ノーテ<闇の精霊。ブラッキー。

## # 魔術師編

マクシミリアン・インフォントイーノ（リアン）

16歳。俺。

利休茶色の髪に深緋こきひの目。

マーゴ・デ・シグナディオ  
二級魔術師。初回登場時は三級魔術師。  
火と風の魔法を使う二属性ダブル使い。

火の一族であるインフォントイーノの現当主であるバルドメロの息子。

3人兄弟の次男であり、兄と姉がいる。  
ティーナとの相性がよく、そのせいでバルタザールの部下になったといっても過言ではない。

バルタザールのもとでは真面目に働きつつ、ザールとティーナの2人の会話に参加せずにぼけーと聞いていることが多い。  
ティーナの精霊であるエーヴを見たときから自分も精霊と契約したいと思って精霊について勉強中。

初回登場：5話

クルス・ベナーリオ

50〜60歳あまいろくらい？ わし  
白＋銀髪、天色の目。

マゴ・デ・プリメラ  
一級魔術師。

水と光の魔法を使う一二属性使い。帝国一の水使い。

ティーナの祖母とは同期で魔術師<sup>マゴ</sup>となった。  
ザールには時々「じいさん」と呼ばれている。

初回登場：2話

バルドメロ・インフォンティーノ

キャラメル色の髪に深緋色<sup>こきひ</sup>の目。

マゴ・デ・プリメラ  
一級魔術師。

帝国一の火使い。一属性<sup>シングル</sup>使い。

ダンディーなおじ様。

マイブル・ブルーバ  
魔導師の試しの後にティーナを研究室に連れて行って術の改良をやってから、時々ティーナを呼んで術の実験を手伝わせている。それが結構ハードなのだが、バルドメロ本人は気づいていない。  
ティーナにはバルドさんと呼ばれている。

初回登場：4話

セリノ・シルヴェストリ  
マゴ・デ・プリメラ  
一級魔術師。僕。25歳より若そう。  
うぐいすちゃ  
鶯茶色の髪にリーフグリーン色の目。天然パーマ。

風の名家であるシルヴェストリ家の当主。  
リアンの姉であるジスレーヌとは知り合い？

初回登場：16話

ドロテア・インフォンティノ

テグナキヤ・マールゴ  
三級魔術師。

リアンと同期の火使いでリアンの従姉妹。

初回登場：15話

フレドリカ・ファルコーネ

ベージュグレイの髪にインディゴ色の目。

ティーナの祖母。  
マールゴ・デ・プリメーラ  
元一級魔術師。

水と闇の魔法を使う2属性使い。ダブル 治癒術にも長けていた。  
ストレイガ  
通称、魔女。

初回登場：1話

## # 騎士編

マルシアル・ロジオン

外見年齢20代。俺。

藤鼠<sup>ふじねず</sup>色の髪、紫黒<sup>しじく</sup>色の目。

黒騎士団長。帝国一の闇使いでもある。

ティーナのことが気に入っている。ティーナには警戒されている。  
今の皇帝とは親戚関係である。

第2皇子であるブノアとは仲がいい。

初回登場：3話

ヴァラント<sup>ヴァ</sup>ランタン・モニチェリ<sup>チェリ</sup>（ヴァラン）

20歳前半。バルドメロの子ども。長男。  
利休茶色の髪にココア色の目。俺。

白騎士、壮騎士。槍を使う。  
性格はバルドメロに似ている。

初回登場：15話

## # 皇帝家編

バルタザール・デオ・ロジオン（ザール）

17歳。俺。

かなりあいろ  
金糸雀色の髪に瑠璃色の目。やや長い髪の毛。

ホワイト・ナイト    ニーバル・ナイト  
白騎士かつ壮騎士

帝国の第3皇子。

マイフル・ブルーバ  
魔導師の試しが終わった後、ティーナを部下とする。  
ティーナが常識がないため、結構説明係になってる。

初回登場：6話

レオーヌ・ドイ・ロジオン

第1皇女。20歳。わたくし。  
陛下に似てる。髪も目も。

留学中。学院では魔眼とか、魔装具とかを学んでいる。  
マシンガントークと一睨みでザールを黙らせることが出来る。

初回登場：11話。

ブノア・レク・ロジオン

陛下の次男。24歳。

魔力が一番あり、魔法可能。  
腹黒。マルシアルと仲いい。オビディオと仲悪い。  
僕。杏色の髪に、ウルトラマリン色の目。

初回登場：12話

オビディオ・ルツ・ロジオン

陛下の長男。25歳。  
体が弱い。政治得意。

パメレシア・オザ・ロジオン（パメラ）

陛下の次女。13歳。  
とつともいじろ  
玉蜀黍色の髪に瑠璃色の眼。  
髪を後ろで縛っていてどこことなく凜として中性的なかんじ。

通称、姫騎士。まだ騎士ではないが、次の試験で騎士ナイトになろうとしている。

初回登場：19話

オスワルド・ジル・ロジオン

帝国14代皇帝。私

玉蜀黍色とうもろこしいろの髪かみの毛けに群青色ぐんせいしよの目めで、短髪たんぱみ。

初回登場：6話

皇后様

長い杏色あんずの髪かみの毛けに新橋色しんばしきの目め

初回登場：6話

## # その他

ジスレーヌ・モニチエリ

20歳。リアンの姉、バルドメロの娘。  
キャラメル色の髪に葡萄色の目。

王国の学院で理論魔術について学んでいる。

シルヴェストリの当主、セリノから「氷の姫君」と言われる。

初回登場：15話

エルモ・インフォンティノ

インフォンティノの前当主。バルドメロの伯父。

初回登場：16話

ヘリナ・クレメンティ

焦茶色の髪、葡萄色の目。

ティーナが住んでいた村の隣村の子。ティーナを「姉さま」と呼ぶ。

一応魔装具屋。

あたし 12歳。

初回登場：13話

エメ

任務の子供さらいの犯人？

ネービーブルーの髪に黒い目。  
精霊見える。

> モデロ < 黒いウサギ。

初回登場：10話。

## # 騎士について

現在、帝国が抱えている軍隊は騎士団のみ。（有事の際には魔術師も軍の一部。）

騎士団には白騎士と黒騎士の二つの部隊があり、基本の隊の構成は同じ。  
ホワイト・ナイト ブラック・ナイト

一般騎士。一般的な騎士はこれのこと。ナイト

地方に派遣され、2年交代で派遣場所を白と黒を入れかえる。  
ホワイト・ナイト（今北・南が白騎士だったら2年後は黒騎士というように）  
ブラック・ナイト

壮騎士（ニーバル・ナイト）。地方や大会での活躍によって一般騎士から昇進する。

壮騎士（ニーバル・ナイト）の半分は地方、半分は帝都。

騎士隊長 白・黒に7人

白騎士団長 黒騎士団長

騎士団長 騎士団全体を統べる。

## # 魔術師について

マーゴ・デ・ブリメーラ  
一級魔術師

魔術師の中で一番えらい。現在、12人。

2年に1度の二級魔術師からの昇進試験、または大会での成績によつて決まる。

服装としては、黒いマントをつけることが義務付けられており、黒いマントに魔力をこめた糸で一本の線が縫ってあり（それぞれ目と同じ色になるらしい）、首もとに帝国の釦がついている。

首もとの釦は魔術師全体でマントの同じところにある。

マーゴ・デ・シグナディオ  
二級魔術師

1年半に1度の三級魔術師からの昇進試験、2属性使い（ダブル）

以上は魔術師の試験に受ければはじめから二級魔術師になれる。

服装は白いマントで魔力をこめた糸で3本線が引かれている。

テグナキヤ・マーゴ  
三級魔術師

1年に1回の試験による。

服装は白いマントで1本線のものである。

## # 魔導師について

魔導師<sup>マイフル</sup>とは

・<sup>オールユーザー</sup>全属性使いであること。  
・<sup>マゴ・デ・ブリメーラ</sup>一級魔術師の各属性でもっとも優れている人に勝ったものであること。

・帝国の王の認証により、<sup>マイフル</sup>魔導師と名乗ることが可能であることの3つの条件を満たしたものが就くことのできる職業である。

帝国ではこ<sup>マイ</sup>ういうふうに定義はされていても、過去に1人も魔導師<sup>ブル</sup>となれる<sup>オールユーザー</sup>全属性使いはいなかった。

魔導師<sup>マイフル</sup>になる<sup>マゴ</sup>＝帝国の魔術師のトップになると考えられている。

過去に条件を満たすものがないため、ティーナがなるまでまだ未定なことが多い未知の職である。

## 勇者召喚！（上）

あー、今日は何があつたっけ？

数学とー、英語とー、おお、体育がある！　よし！　……げ、古文もあんのかよ。予習してねー。

俺は今日の授業を確認しながら高校までの道のりを歩いていた。

俺が通う高校は自宅から徒歩15分。

いつもは自転車で通ってるんだけど、昨日の夜から今日の朝にかけて降った雪で道路が凍っていて転んだら大変だから今日は徒歩で登校。

体育はバスケだよな！　俺の見せ場！

久しぶりだよなー、最近は体育なかったから体がなまってるよな。古文は俺の敵だから……孝典（俺の友達な）とか予習してあるんじゃないか？　見せてもらおう。

大体、理系な俺に古文なんて必要あるのかよ？

そんなことを考え、プリントを見ながら歩いていなかったのがいけなかったのかもしれない。

それまでと全く変わらないペースで左足を前に出した。

地面に着くはずのところ、何も踏みしめた感覚がない。

え、雪で滑ったとかそういうわけじゃないのか！？

そのまま重力に従って左足が落ちたであろう穴に落ちる羽目になった。

「うわあああああ……」

思わず叫んだ俺の声は近所迷惑だったかもしれない。  
もし聞こえていた人がいたら誰か助けてくれ。

「つた！」

そのまま落ちていった先にあつたのは自然がいっぱいなところでした。

俺が座っている周りには外国人らしき人達がたくさんいます。  
どうやら地下にはたくさんの方が住んでいるようです。

登校中に穴に落ちた高校生より。

じゃなくて。

いろいろと疑問だが、何で道に穴があつたんだ？ っていうか穴に落ちた先に更に空が広がってるんだ？ え、この人達誰？？

みんな俺に目を向けて……というかじつと見てくる。  
中には顔が青くなっている人も見える。

「あの………」

「ゆ、勇者様だ！」

「勇者様！」

「王様に報告を！」

「……は？」

『ユウシャ』って『勇者』？ 俺が？ どのRPG？

尻もちを着いた状態から立ち上がろうとしたら、強烈な眠気に襲われる。

そのまま視界が暗転した……。

帝国の栄えある首都ライシア、皇帝陛下が暮らしている城のとある一室にて

「『勇者召喚』？」

「そうだ。この村で行われた。」

そう言って地図上のある村を指したのを私     アルベルティーナ  
がのぞき込む。

帝都の北西、帝都からは普通に行って2日つてところかな。

「陛下から勅命だと言われたのですが、何のことかさっぱりなんですけど……」

数時間前に陛下に呼ばれ「事態を収束してくるように」という命令、いや勅命をうけた。

それに是、と返したのはいいのだが、どんなことが起きていて何を収束してくればいいのかさっぱりわからない。

「詳しい説明はバルタザールから聞いてくれ。」と言われたのでザール殿下のものに来て何をすればいいのか説明を受けることにしたのです。

行くのは私一人。同行者、なし。

「今回勇者召喚が行われたこの村では今の季節に毎年祭りがあるんだ。

今から1000年くらい前の話に則ったものでな……確かなことかはわからないが、

当時世界は魔王に侵略されそうになっていたという話がある。」

「……魔王？」

「ああ、魔王だ。」

うわー、ファンタジーな世界だからもしかしたら……と思ったら魔王は「いた」んですね。

もう滅ぼされちゃってるので「いる」わけではないんだ。いなくてよかったけど。

世界征服ってなんかありきたりなかんじ。

魔王について私が考えているのを余所に、ザール殿下は更に説明を付け加えてくれる。

この世界の住人で魔王に挑んでいくものは少なからずいたらしいが、倒すことができなかった。

そこで当時の最高とも言える魔術師（その頃からも魔術が使える人がいたらしい）が挑んだのが魔王を倒せるものを召喚すること勇者召喚だ。

召喚された人は数人の仲間を連れ、無事魔王を倒し、世界は平和に戻った。

話自体はよくありそうなおとぎ話なんだけど、この世界では多くの人が昔にあったことと考えている。

まあ、そうですね。

実際に魔法が使えて魔物がいる世界だから魔王が居たとしてもおかしくないってことですよね。

今回の私の任務に関わってきている村は何でもその勇者召喚を行った場所で同じ召喚の儀式を毎年行っているらしい。

今まで一回もそれで勇者が召喚されたことがなかったのだが（そりゃあ当時の最高の魔術師が苦勞して行ったものを一般人ができちゃったらそれの方が問題だ。）今回の儀式で人が現れた。

まだ調べている途中だけど、今回の召喚は偶発的な事故。

けれど、「勇者召喚」によって人が現れたことによって「魔王が復活してるのでは」という考えを持った人が出てきてしまった。

「私がやるべきことは『勇者様』を元にいた世界に返すことですか？」

「ああ。幸いなことに召喚が行われてから日が経っていない。

お前の魔術ならなんとかなるだろう？」

「（なんとかなるって……）なんとかしてみます。」

「<sup>マイフル</sup>魔導師アルベルティナ・ギラルディーニ。今回の事態の収束を一任する。」

「承りました。」

## 勇者召還！（下）

……この部屋に俺が生活を始めてからは2日が経った……と思う。  
曖昧なのはまずはじめに居たところで意識を失って気がついたら  
ここにいたわけだが、その意識を失った時間がどれくらいだったか  
がわからないからだ。

この2日は一日三食の食事が運ばれてくるだけで他は何もするこ  
とがない。

誰かに質問をしたいのだが、外に通じる扉は一つ、扉に鍵がかか  
っている。窓は小さな窓が高いところにあるだけ。

普通の高校生である俺にはこの部屋から出る手段がないのだ。

そんな状況であるにも関わらず、俺は結構冷静。

自分でもちよつと驚いてるんだけどパニックにはならない。

……けど、この状態があと2、3日も続くようじゃこんな精神状  
態じゃいられないよな！。

部屋のノックが聞こえたので返事をする。

お、やっと誰か俺にこの状況を話してくれることになったのかな  
？

「はい？」

「失礼します。」

そこに入ってきたのは俺よりも年下な女の子。

着ている服からいかにも「魔法使い」ってかんじ。

俺がここに来たときも「勇者」とか言う言葉が聞こえたから魔法  
があるのか？

この子、髪の毛は日本人みたいに黒いけど、目の色が普通じゃありえないかんじだし。

「この国で魔導師<sup>マイフル</sup>の任についております、アルベルティーナ・ギラルディーニと申します。

彼方は今回召喚されたという方で間違いないでしょうか？」

「召喚だったんスカ？ ……とりあえずいきなり落ちてきたってことには間違いないと

思うんですけど……。」

彼女は俺が居る部屋をぐるりと見回し、ちよつと考えた後（なんかぶつぶつ言っているのが聞こえた。まいぶる？ とか言っていたからなんかの呪文だったのか？ それとも独り言？）、俺の方に向き直った。

「信用できないとは思いますが、今回彼方がここに来たのは召喚の儀式が

あったからなのですが、……彼方がこの世界に来てしまったのは偶発的な事故でして……。」

「事故？」

「申し訳ございません。」

今回俺が来たことについて簡単に説明してくれた。

俺は「世界を救う」とか「魔王を倒す」とか（同じようなことか？）しなくていいんだな、よかったよかった。

安心して彼女にすぐに元の場所に返してもらえるのかと聞いたら俺が召喚されてからあまり日が経っていないので可能だという返事が返ってきた。

じゃあ日が経ってたら俺永久に異世界生活だったのかよ……やば

かったな。

「自分が住んでいたところの名前を覚えてもらってもいいですか？」

「あ、はい。」

これって普通に 県の××って言えばいいのかな？

あ、地球の日本っていうのも必要か？

必要そうだな、だってここ、魔法が存在しちゃう異世界だもんな。

そうやって話したら「じゃあ始めます」と言って俺にその場から動かないことを指示した。

なんかすごいあっさりしてるな。

こういつときって小説とかだと「戻す方法がわからない」とか「を倒せば元の世界に帰れる」とかじゃね？

ま、事実と小説は違うつてことが。

ボーツと突っ立っていたらアルベルティーナちゃん？ は何やら俺にはわからない言語を話し始めた。

さっきまで言葉が通じてたわけだから何かしらの呪文でも唱えてるのかな。

「ご迷惑をおかけしました。もうこちらの世界に呼ばれるようなことは

ないと思います。

こちらの世界に来た時間・場所に戻るようになります。」

「あ、ハイ。」

俺がわかる言葉で彼女が話し始めるとほぼ同時に、自分の足下にだんだんと黒い穴のようなものが広がっていく。

……まさか、こつちに来たときと同じ？　また転落すんのかよ？  
体を移動したかったが、それでもし元のところに戻れなかったら  
大変だしと思つて来るであらう転落に備える。

彼女が左手でくるつと円を描く動作をすると、今までただ黒い地面  
だったところがいきなり穴になる。

「うわっ！」

「すみません、帰るときは来るときと同じ手段で戻るようにして  
あつたので……。」

来たときと同じように穴に落ちた俺に最後に彼女が謝っているの  
が聞こえた。

君のせいじゃないことはわかってるけどびびるものはびびるから  
なー！

・

・

どさっ 「痛っ」

目を開けるとそこはいつもの通学路。  
体の下にはコンクリートの道路、周りは塀に囲まれた住宅。

「戻ってきたのか……。」

なんかあつさり終わったな、俺の異世界旅行。いいんだけどさ。

近くに鞆が落ちているのを見つけて鞆を拾う。  
鞆の中に入っている携帯を何気なく開いて時刻を見る。 8時30分。

「…… 8時30分？」

遅刻寸前！！

俺は携帯と鞆を片手に持って雪が残っている道を走り出した。

「はい、無事に終了しました。」

「そうか、それはよかった。」

『勇者召喚』で来た彼は外見からして普通の高校生だった。

「地球」の「日本」って言ってたし、私の「前の」世界だろうな。

彼に言ったとおり、もう誰かが喚ばれるようなことはないだろう。  
私も召喚の詠唱も魔方陣も見ただけ、今の魔法理論じゃ他の世界の人を喚ぶどころか1M前にある物を召喚陣まで移動させるのも不可能だし。

本当に何で今回人が喚ばれちゃったかわからないし。

「召喚陣については？」

「今回何で人が喚ばれてしまったのかわからないくらいの失敗作だと思うのですが……。」

「ああ、俺に説明しなくていいぞ。それについては書類で提出だ。」

「……は？」

「物質、ヒトの移動について専門で研究している召喚師が是非とも報告を、だとさ。」

「え？ 私がですか？」

「他に誰も帝国から行ってないだろう？」

「そうですけど……。」

自分でこの村まで来て召喚陣調べればいいじゃないですか。

私、召喚は専門じゃないですから。

餅は餅屋って言うじゃないですか！

そういう私が文句を言いたいのを察した遠話越しの殿下がため息をついていった。

「城に居る召喚師はじいさんばかりだ。……もうそんな遠出できるような年の

方々じゃないんだよ。召喚に対する情熱は人一倍だから手は抜くなよ。」

「……………」

「父上がティーナは一週間滞在可能な時間が空いている……いや、空けたとおっしゃっていた。」

「一週間！？」

それくらいの日時間調査するのはいいですけど、ここの村の人達と一緒にいるのってきついものがあるんですよ？

彼のいる部屋を教えてもらうのにも時間がかかりましたし、召還したら今度は「何で勇者様を帰したんだよ」みたいな目で見られるし！

そんな私の心境を知らない殿下は「父上がそこにある召喚陣はデ  
イーナが記録して消してくるようにといい命令だ。がんばれよ。」  
と言って遠話を終わらせた。

……召喚陣が刻まれている石版まで行きますか。

）勇者召還！

終  
）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4556n/>

---

導くもの+

2011年1月23日05時30分発行